

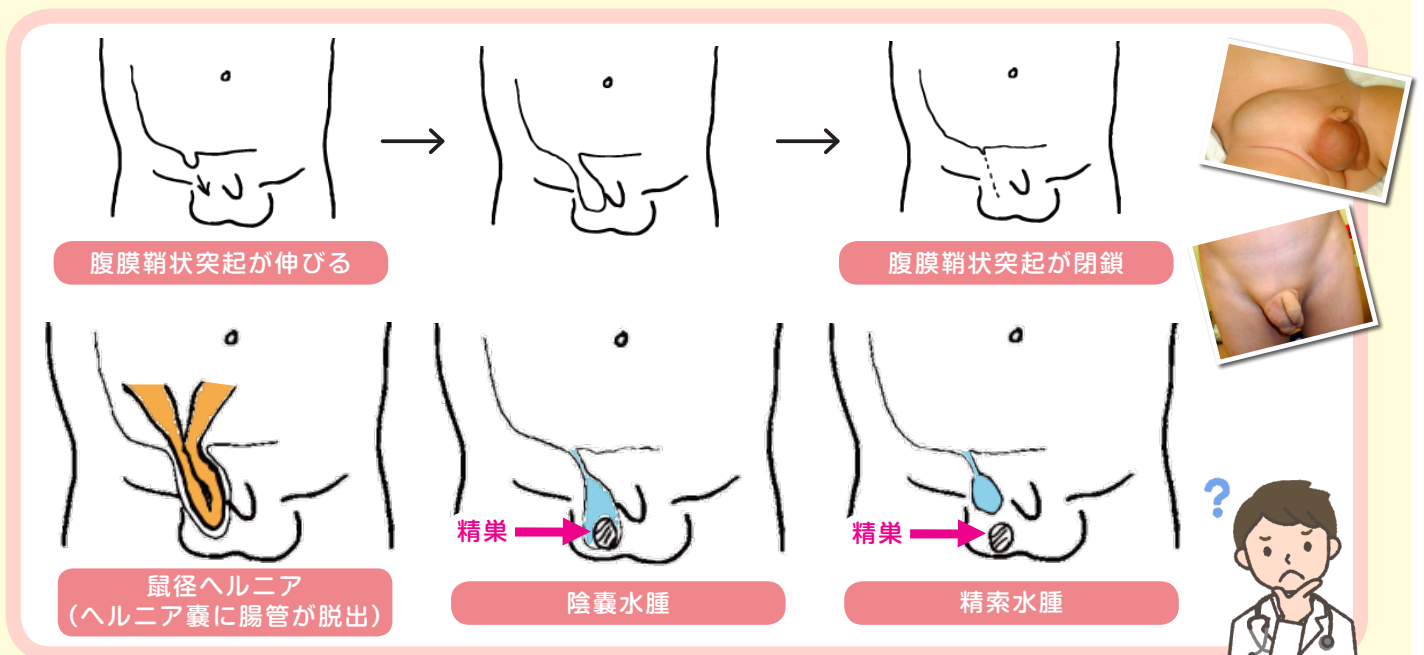
## 小児鼠径ヘルニア(こどもの脱腸)、 水腫(水瘤)

だっちょう 脱腸ってご存知でしょうか？  
そけい 鼠径ヘルニアという病気のことなのですが、  
こどもの鼠径ヘルニアは大人のものとは少々異なり、手術方法も違います。  
鼠径ヘルニアの根治術は小児外科で最も数が多い手術です。今回は小児鼠径  
ヘルニアや陰嚢水腫、精索水腫、ヌック水腫についてです。



### 鼠径ヘルニア、水腫は なぜできるのでしょうか？

いきなりなのですが、赤ちゃんが生まれてくる前のお話です。妊娠3か月頃にお腹の裏打ちの膜である、腹膜の一部がお腹の中から足の付け根の方にポケットのように伸びてきます(腹膜鞘状突起)。これが普通は閉じてしまうのですが、生まれた後も閉じないと腹膜鞘状突起の開存ということになります。その中に腸などお腹の中の臓器が飛び出して来たのが鼠径ヘルニアです。ちなみに、閉じかけの腹膜鞘状突起が細く残り、腹水だけが通る状態だと男児では陰嚢(精巣)水腫(水瘤)や、精索水腫(水瘤)で、前者は精巣の周囲に、後者は精巣よりお腹側に腹水が溜まります。女児で同様に水が溜まるとヌック水腫(水瘤)といいます。



生まれてくるときに腹膜鞘状突起の開存がある割合は妊娠何週で出生するかで違い、早産児は満期産児よりも多いと考えられています。また、赤ちゃんは生まれた後でもある程度は腹膜鞘状突起が閉鎖する可能性があると思われます。鼠径ヘルニアは開存した腹膜鞘状突起(ヘルニア嚢：ヘルニアの袋)に物が入らないと発症せず、また少し入っただけでは気付かれないこともあるので、腹膜鞘状突起の開存率ははっきりしません。鼠径ヘルニアがみられる割合は、満期産児では1~5%、早産児では16~15%という報告もあります。また、女児より男児の方が少し多く、右の方が左より多く、1割くらいは左右両方あるといわれています。



## さて、鼠径ヘルニアは 何が困るのでしょうか？

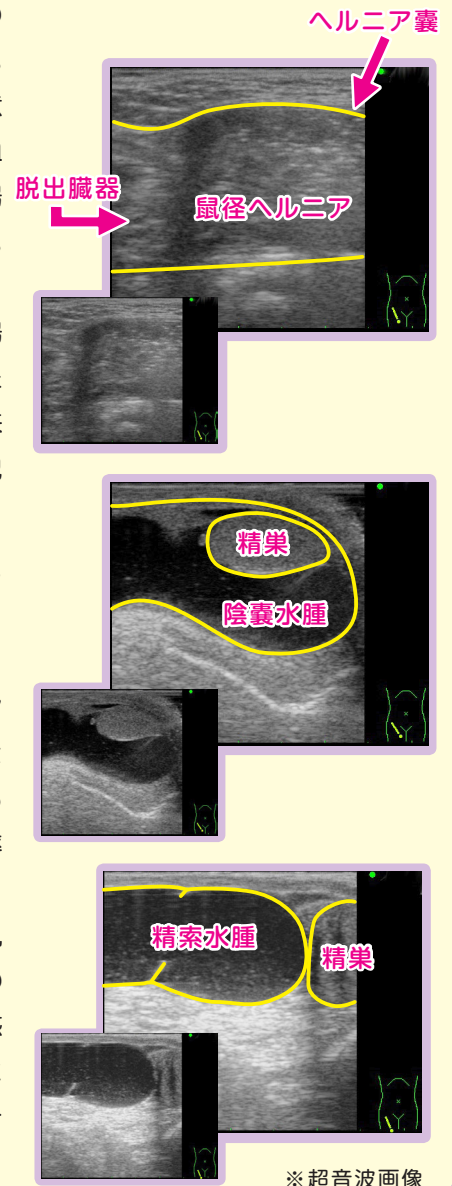


省堂 大辞林)、「腸や子宮などの内臓諸器官が、組織の間隙からとび出し、そのまま腫れて、もとに戻らなくなった状態（難読語辞典）」などが見つかりました。ヘルニア嚢に内臓が飛び出して戻らなくなった、という事です。また、狭義の意味で嵌頓には血流障害を伴う、という定義もあり、飛び出した腸が元に戻らず血も通わない状態だと、腸が腐るので直接命にかかわることになります。また、腸が戻らないと腸閉塞にもなり、痛みが出たり吐いたり不機嫌になったりします。内臓が戻らない場合、手でお腹の中に戻すことが出来れば後日手術となりますが、戻すことが出来なければ緊急手術が必要です。また、鼠径ヘルニアと診断した場合、通常は嵌頓を予防するために時期をみて手術を行わなければなりません。ただ少し特殊な場合があり、ヘルニア嚢に卵巣が出て戻らないときは血流障害を来すことは珍しいので、緊急ではなく早めに手術を行うようにしています。早産児で生まれたばかりの時も様子を見る場合があります。

水腫の場合は、自然に腹膜鞘状突起が閉じて治ることがしばしばみられます。2～3歳になっても治らなければ手術を考慮します。

鼠径ヘルニアや水腫の診断は、内臓や水が入っている状態で超音波検査を行うと容易に出来ます。触るだけで充分診断できることもあります。しかしヘルニア嚢自体は非常に薄いので、中身がない時に袋そのものがあることを証明することは困難です。当科では立位や下腹部を圧迫したり、患者さんにお腹に力を入れるように声かけをしたり、泣いているときに超音波を行うような工夫をして診断率を上げているのですが、それでも内容が入らなければ確定診断できません。また、水腫では光が透けて見えるという診断方法もあるのですが、腸が出て同じ様に見えることもあるので、超音波検査が確実だと考えています。更に、嵌頓と水腫の区別で注意が必要です。外観は似ている(慣れた小児外科医は見かけや触った感じで判定出来ることもあります)のですが、嵌頓はすぐに処置が必要であるのに対し、水腫は経過観察でよく、嵌頓と間違っで手で内臓(ありませんが)を戻そうとしても当然戻りません。

飛び出す臓器は、腸管、大綱(お腹の中にある脂肪の膜のようなもの)、卵巣、卵管などです。自然に出たり入ったりしているうちは、少し不機嫌や違和感などがあるかも知れませんが、普通は大したことはありません。キーワードは嵌頓かんどんです。インターネットで検索してみると、「腸や子宮などの内臓諸器官が、組織の間隙からとび出し、そのまま腫れて、もとに戻らなくなった状態。嵌頓ヘルニア。(三



※超音波画像

## 治療方法



薬や注射の効果はなく、治療方法は手術しかありません。全身麻酔を行い、ヘルニア嚢を根元でしばって塞いでしまいます。大人の場合は補強のために人工物を入れたりするのですが、小児では必要ありません。鼠径ヘルニアも水腫も手術方法は同じです。水腫に対して以前は針を刺して中の液体を吸い出すことも行われていましたが、治療効果はなく危険や痛みを伴うので意味がありません。大人に比べ単純な手術かも知れませんが、年齢による相違点があったり、小児の体であるため単純にいろいろなものが小さかったり細かったり弱かったり、また意外と解剖のバリエーションがあったり、非常に薄いヘルニア嚢を破らないように剥がす必要があったり、と小児に不慣れな術者にとって必ずしも簡単な手術ではありません。そうあることではないと思いますが、ヘルニアの袋ではなく、大腿部の神経や血管・膀胱や卵巣をしばったなど、通常考えられないような手術トラブルも聞きますので、小児の手術に慣れた病院を受診されることをお勧めします。

